



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 南蛮世界地図昇風研究小史補論：カエリウス系について   |
| Author(s)    | Takahashi, Tadashi  |
| Citation     | 待兼山論叢. 日本学篇. 1990, 24, p. 1-15  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/56462">https://hdl.handle.net/11094/56462</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 南蛮世界地図屏風研究小史補論

——カエリウス系について——

高 橋 正

## はじめに

いわゆる南蛮屏風の類いに世界地図を描いたもののあることは周知の事実であろう。その世界地図はいうまでもなく近世初頭、ヨーロッパ人により作成された地図に基づくものであるが、その典拠は一種類の図ではなく、数種類あることもまた明らかである。これに関しては従来諸氏により探求が試みられてきたが、その総てが解明された訳ではない。

筆者はかねてこの種の屏風のうち外国の都市図を描くものと共に一双をなす屏風についてその典拠を探ってきたが、その契機はむしろ都市図の典拠の究明にあった。しかし、探究の過程において、これらの都市図と世界地図が密接な関係を有することが明らかとなり、結果としてこの類いの屏風がオランダ人カエリウスの世界地図を典拠とし、南蛮地図屏風のうちでは最も新しく作成されたものであるということが明らかになった。

しかるにこの間の事情に関しては、筆者が前稿<sup>(1)</sup>の一部において簡略に述べているにすぎない。従って本稿においては、この問題の解明の過程を今少しく詳細に述べ、なお残されている問題を提示して諸賢の教示を得たいと考える。

# 一

ここで問題とする類いの屏風は、前稿で「南蛮世界図・都市図屏風」と記したもので、神戸市立博物館屏風（池長屏風）、御所（宮内庁）屏風、南蛮文化館屏風（北村屏風）をいう。ただし、北村屏風ではアメリカ大陸を描く部分が欠けている。また、香雪美術館屏風（村山屏風）も同種の世界地図を描いているが、都市図ではなく、いわゆる「レバント戦闘図」と対になっている。

いずれにしても上記の五つの屏風は、その世界地図の典拠からしてはいまや「カエリウス系」<sup>(2)</sup>とでもいうべき一つの類型に属するものといえよう。

筆者がこの類いの南蛮屏風に関心を抱くようになった契機は、前稿で述べたように一九六九年四月に訪れたマドリードの実景が、当時一般にはこの町を描いたとされていた池長屏風の都市像と余りにもかけ離れていたことにあった。しかし、この時は都市図と対になっている世界地図にまで思いを致していた訳ではなかった。

実は、このいわゆる「マドリード図」に関しては、その前々年に北村芳郎氏が、その所蔵屏風（北村屏風）中の同図に「せびいら」とあることからセビリヤを描いたものであることを明らかにしていた。<sup>(3)</sup>しかし、氏はその出典に関しては触れることなく、参考図としてオルテリウス（実はブラウンとホーヘンベルク——高橋注）の『世界の

諸都市』中の屏風と図柄の対応するセビリヤ図を掲載するに止めている。

この書に類似の図があるからといってこれ直ちに屏風図の典拠と断定しなかった氏の慎重な姿勢は敬服に値するものといえよう。その後の屏風研究は、この書がその直接の典拠でなかったことを明らかにするからである。<sup>(4)</sup>

## 二

それでは当時、池長屏風世界地図の典拠についてどのような見解があったのであろうか。南蛮世界図屏風について最も包括的に詳密な検討をおこなっていた中村拓博士は次のように述べている。「(然し)池長氏図の原拠を秋岡氏の挙げた J. Hondius の一六〇八年の大図に需めるのはどうであらうか、何となればこの図で現存しているのはロンドン王立地学協会所蔵の一点だけであるという稀覯な珍図が果して池長氏旧蔵図を描いた絵師の手本となり得たであらうか、疑問なきを得ない。外に容易に手の届く J. Hondius の類図が沢山あるのに選りに選って流布の極めて少いこの図が屏風図の原拠であると言うのは、他に明白な証拠がない限り信じられない。況や(中略)その息 Henricus Hondius の Novus Atlas, 1638 中(2)の原拠を見出すに於ておやである。<sup>(5)</sup>」

いささか長い引用となったが、前稿で示したように今は典拠とされることになった図は「一点」どころか現在では失われてしまったと思われる図であったからである。しかし、ここに秋岡・中村両氏の所説を長々と紹介することは最早無意味となった。長崎県立美術館の鴛田忠正氏の精力的な探求が、これら両氏の説を打破することになったからである。即ち、一九七三年坂本満氏は池長屏風の解説においてその典拠の年代に関し次のように述べている。<sup>(6)</sup>「鴛田忠正氏は更に慶長前半まで年代を遡らせられる。ローマ図が基づく一六一〇年とパリ国立図書館展覧

会（一九七一―七二年）の類似地図とから私は鴉田説に近い最上限を一六一〇年ごろと考える」

ここでいう「ローマ図」については、坂本氏は先に「ブラウン・ホーヘンベルクの都市図帖からではなく、じつは一六一〇年アントワープのCornelius・ガルの『福音イグナティオ・ロヨラ伝』第十二図よりとっているらしい（後略）」と述べ、その図を示しているが、<sup>(7)</sup>その図版に小さく、筆者はかねがねその大版を見たいと思っていた。もっとも坂本氏の示した小型の図版でさえもこの図と池長屏風のローマ図の類似性は明らかであった。

一九八三年、筆者がナポリ東洋大学へ出講した際に当地で入手した『ローマ地図集』<sup>(8)</sup>中のこの「ガル図」の大型図版を見出し、坂本氏のこの図についての所説を確認することができた。

同書の解説によるとこの図の掲載されているロヨラ伝の<sup>(9)</sup>著者はベトルス・リバデネイラ Petrus Ribadeneyra (1526, Toledo～1611, Madrid) であり、そのローマ図の作成には Cornelio (1576～1650) と Teodoro (1571-1633) Galle の他に Adriano Callaert (c. 1560～1618) や Carlo van Mallery (1571～dopo 1633) がかわっている。なお、リバデネイラのロヨラ伝の初版はナポリで一五七一年に、そのロヨラ伝の初版はマドリードで一五九四年に出版されている。<sup>(10)</sup>

ガル図の景観年代の下限は、グレゴリオ十三世により一五八四年建設されたマロニティ学院 Collegio dei Maroniti やドメニコ・フォンターナ Domenico Fontana により一五八六年サン・ピエトロ広場に建てられたオベリスクを描いていることなどから十六世紀末であり、ガル図の年代が伝記刊行年より遡るのではないかとの不安もあったが、対となった世界地図屏風の典拠の作成年が一七世紀初頭であることが明らかとなるに及んで、この不安は一応解消された。

さらに、坂本氏は前述の「バリ国立図書館展覧会の類似図」について後に「その後入手した写真により調べると地形の重要な部分において一致しないところがあることがあった。」<sup>(12)</sup>と述べ、「ホンディウスの一六三八年の地図（中村説——高橋注）より前につくられたものを原典とするとされる鴎田氏の説の完成を待ちたいところである」とされている。

### 三

坂本氏が期待を寄せた鴎田氏の研究は、秋岡・中村両説を詳細に批判・検討し、改めてその典拠が一六〇六年アムステルダム刊行のメルカトル図法によるブラウ世界図であることを主張した。<sup>(13)</sup>

さらに鴎田氏は、氏の大学時代の恩師室賀信夫博士から、ケーニク著『ウィレム・ブラウ伝』<sup>(14)</sup>中に、ヴィーダー博士旧蔵ブラウ世界図の写真がロッテルダム海事博物館にあり、その図の周辺に王侯騎馬図や都市図を描いているとの記載のあることを教示され、渡蘭されたがその写真を目撃することはできなかった。<sup>(15)</sup>この間の事情については前稿でやや詳しく記したのでここでは改めて述べない。

しかし、室賀博士はユトレヒト大学のシルダー氏を通じて、この写真のネガを入手、筆者にその写真一枚を恵与された。<sup>(補注)</sup>筆者は鴎田氏の結論に依拠しつつ、この写真を利用し南蛮屏風都市図について屏風相互間の比較検討に研究の焦点を移すことになった。<sup>(16)</sup>

また、室賀博士は一九七五年十二月この類いの屏風の解説においては鴎田氏の所説を紹介、<sup>(17)</sup>これが定説となったが如き状況であったが、さらに博士は一九七八年、同じ屏風の解説において次のように述べている。<sup>(18)</sup>「ただ精細に

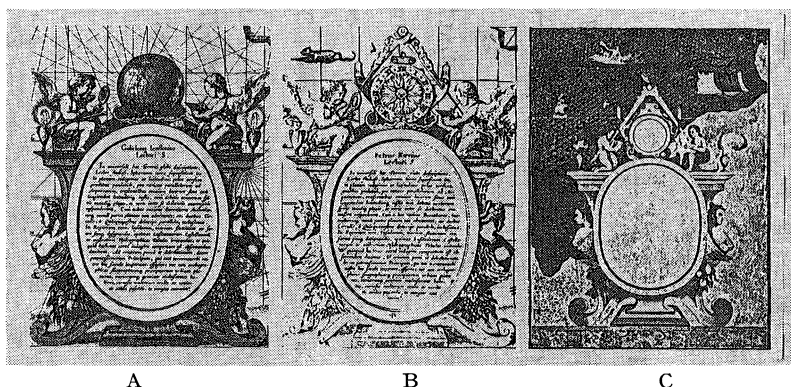
調べると細部には小異があり御物図はブラウ図（一六〇六年版——高橋注）そのものにもとづいたものでなく、むしろブラウ図をほとんどそのまま写して刊行したペトルス・カエリウスの一六〇九年（慶長十四）の世界図によっているらしいところもある」。

実は、このカエリウス図と屏風図との関係については、同年五月に刊行された『御物聚成、絵画Ⅱ』において御所屏風の第二扇のカルトゥーシュカルトゥーシュに関し坂本氏が次のように述べている。<sup>(19)</sup>

「その第二扇上部の飾り枠カルトゥーシュ中の図は室賀博士によると黄道の説明図であり、その下方中段には月蝕図、その下段には空白の飾り枠がある。これは一六〇六、七年の前掲図（ブラウ図——高橋注）左下のものと酷似しながら上部にコンパスがつけ加えられており、室賀博士は筆者への私信で、これが一六〇九年にカエリウス（Kaerius, van den Keere）が刊行した世界図にある飾り枠と同じであることを指摘された。しかし、カエリウス版が王侯図その他をもつかどうか確認できないので、原図についてはまだ未解決の問題のあることを述べておられる。」

このカエリウス図は、シルダー氏がパリ国立図書館所蔵の一六一九年版図のコピーを室賀博士に送付したものである。世界図の部分のみを残し、王侯騎馬図や都市図を欠いているが世界唯一の図である。これについても詳細は前稿を参照されたい。

ついで、シルダー氏は一九七九年『イマゴ・ムンディ』誌においてブラウ図に関する論文を公表<sup>(20)</sup>、このカエリウス図のみならず御所屏風一双の写真を掲載した。しかし、これら両者の関係については深くは言及せず、日本人学者の他にこの問題の解決を委ねると次のように述べている。“The scope of this study does not permit a detailed description of these screen map, This must be left to Japanese scholars.” この論文の注目す



第1図

- A Cartouche of Blaeu's World Map (1606)  
 B Cartouche of Caerius's World Map (1619)  
 C Cartouche of Goshō-byōbu  
 by G. Schilder (Cf. note 21)

き点は、先述の一六〇九年版カエリウス図の存在を推定したことで、南アメリカの南を廻るル・メールの航海は一六一五—一七一年におこなわれているため、〇九年版では当然ルメール海峡は御所図同様描かれていなかったと考えるべきである。さらにシルダー氏は一九八一年この類いの屏風図の典拠に関する問題を包括する大著を著した。<sup>(21)</sup>ここでは先述の室賀博士の坂本氏への私信にあった御所屏風第二扇のカルトゥーシユの図版を、これに対応する一六〇七(六)年版ブラウ図、一六一九年版カエリウス図のそれらを並べて掲載し、最前者が最後者と類似していることを明示した(第1図)。

さらにこの論文において注目すべき点は、御所屏風とカエリウス図の図形の違いとしてニュー・ギネア(イリアン)と日本の二つを挙げていることである。まずイリアンの図形についてシルダー氏は、御所屏風のそれが恐らくはポルトガルの影響によるものであるとすることで、その理由については述べていない。従って以下少しくこの問題について検討することにしよう。



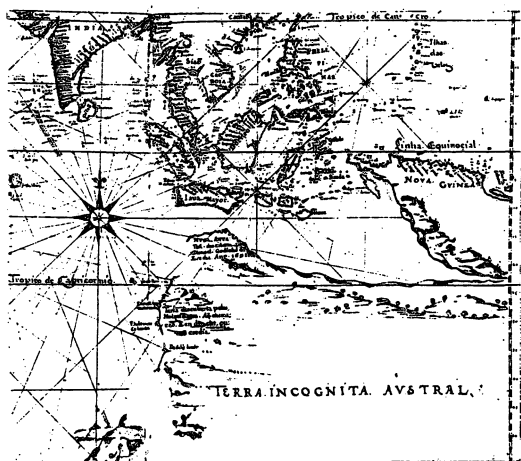
## 四

いまここにイリアン周辺に関する地図史を詳述する余裕はない。この問題は南蛮世界図屏風全体との関連で別稿において論ずる予定である。しかし、一六—一七世紀中葉のヨーロッパ製地図におけるこの地の図形はつぎのように大別できよう。

(一) 南方未知大陸 *Terra Australis Incognita* (*Terra Australis Nondum Cognita*) から北方へ突出した半島の一部として示されたもの。一六〇六年版ブラウ図や一六一九年版カエリウス図、池長屏風や村山屏風がこれである。この場合、半島の西北に位置する小島としてノヴァ・ギネアまたはバプアを示すものも多い。なお、(一)の変種として南方未知大陸の沿海に位置する大島としてのノヴァ・ギネアを示すものであるが、これは先の半島を切り離して島としたものであるというまでもない。

(二) モルッカ諸島の東に、東—西あるいは東北東から西南西にかけてほぼ一直線に長い海岸線として描くもの。イリアンにヨーロッパ人が始めて到来したのは、一五二六年ポルトガル人のジョルジェ・デ・メネセス *Jorge de Meneses* であり、それから三年後、その北岸が探査されている。<sup>(22)</sup> この図形は、ロポ・オーメンやディオゴ・オーメン、アントニオ・ミロ等一六世紀のポルトラノや小林屏風、山本屏風など初期の世界図屏風のあるものに見られ、いま問題にしている屏風では北村屏風がこれに近い。

(三) 南方未知大陸の北方に突出した半島の西北西に長く延びた半島として描かれたもの。御所屏風の図形はこれに近い。とはいえ、御所屏風のようにイリアンの西北半島の南側に長い大島を示す図形は当時のヨーロッパ製地図



第2図(部分)

でも珍しく、管見によればワシントンの国会図書館蔵ジョアン・テイシェイラ「インド洋・極東図」がこの島を描いているが、イリアン西部を示すのみである。御所屏風では東部はカエリウス図を襲っているので西部のみ(世界地図ではない)この種の図によって改変したものと考えられる(第2図)。なおこの図はテイシェイラが一六三〇年に刊行したアトラス中の一図として描いたもので、オランダ人ヘッセル・ヘーリッツの「インド洋図」(一六二二)を粗略に写したとされているが、ヘーリッツ図を見ても問題の大島はなく、西北半島の南側は漠然と描かれているだけである<sup>(25)</sup>。

この長い大島を示す地図としては他にポルトガル人マニエール・ゴディーニユの描いたブリュッセル王立図書館所蔵『南アジア地誌』中のアジア図<sup>(26)</sup>(一六一五—二二)がある。しかし、この図のノヴァ・ギネアは独立した大島として描かれ、その西北の半島に「バプア」という地名を示している。つまり、御所屏風のイリアンが南方未知大陸の一部であるのとは異っている。また、同図書館にはゴディーニユの描いたと推測される地図集があり、その一図「アジア図」にはイリアンを西半分だけ描いておりこれが島か大陸の一部か不明であるが、その西北半島の南に長い大島を描いている。

さらにゴディーニユ図と同様な図形を示す図として、パリ国

立図書館所蔵の『ペリー侯のアトラス』中の楕円形世界図（二六二八頃）<sup>(27)</sup>があり、無記名ではあるが字体の類似等からジョアン・テイシェイラによるものとされている。

この問題の長い大島が現実は何を示したものは明らかでない。西イリアンの南にこのような大島は存在しないからである。また、これ推測する手掛となるべき地名も管見では見られない。しかし、いま敢て若干の可能性を示すとすれば次のようなことが考えられる。

① ノヴァ・ギネア本島とは別に示されたバプア島の名残り。② セラム島を二重に描いたか、あるいは本来のセラム島を別島とし、別にセラム島を描いた。③ アル諸島を一島として描いた等<sup>(28)</sup>が考えられるが、いずれも確証はなく、後考を待つ。

さて、上記三種のイリアンの図形はおよそ(一)(二)(三)の順序で現われ、(三)はトレスがイリアンとオーストラリア間の海峡を通過した後も、南方未知大陸から突出した陸地の半島として描き、さらに後には南方未知大陸から独立したオーストラリア大陸から突出した陸地の半島として描くなど可成りの混乱を見せている。しかし、それは後の話であり、問題の(三)の描写は御所屏風の典拠となったカエリウス図が刊行された一六〇九年頃には現われていなかったと考えられる。従って他のカエリウス系屏風では(三)以外の図形を示している。

シルダー氏は御所屏風の作成年代について、ローマ図刊行の一六一〇年と幕府がキリスト教を禁じた一六一四年の間<sup>(29)</sup>においているが、筆者はイリアンの図形から見て、二〇年代から、場合によっては三〇年代も考えることもできると推測している。

## 五

カエリウス図と御所屏風の相違点として、シルダー氏が示したもう一つの点は日本の図形である。これについても氏は、日本側の資料が利用されたものであると述べるだけである。

イリアン周辺の図形と異なり御所屏風の日本は、北村屏風を除く他のカエリウス系屏風と同じ形を見せている。確かに、ブラウ図やカエリウス図の日本の図形がいわゆる「ティシェイラ型」であるのに対して、御所屏風等は、初期南蛮世界図屏風の若干、例えば下郷屏風や浄得寺屏風等に見られる型であり、中村拓博士の「戦国図型」、即ち、筆者のいう「モレイラ型」<sup>(31)</sup>日本図である。先に除外した北村屏風のそれも、大きくいえばモレイラ型に属し、他の同系屏風に比してやや粗雑に描いた結果、違った印象を与えているものと思われる。

南蛮世界図屏風に描かれた日本の図形に関しては別稿を用意すべきであろう。ここではただ御所屏風における上記二点の図形の改変が、屏風画家の勝手な想像によるものではなく、確たる典拠に基づくものであったことを明らかにするに止めたい。<sup>(補注2)</sup>特にイリアン周辺の描写に関する前述のティシェイラ図やゴディーニュ図の存在はこの意味で重要である。

## むすび

本稿の一部は、かつて筆者が「室賀信夫先生と南蛮地図屏風」と題して、日本地図資料協会の上方例会で報告したところである。この会合は、同協会の編集になる『室賀信夫先生追悼文集』<sup>(32)</sup>の完成を機に開催されたものである。

この文集で、筆者の師、織田武雄博士は次のように述べている。

「また室賀さんの示教によって、すでに高橋正氏によって都市図、鵜田忠氏によって王侯騎馬図の研究が発表されていますが、おそらく室賀さんもこれらの問題を集成した論考を執筆される意図を有して居られたものと思います。／したがって室賀さんが遺されたこの貴重な資料に基づいて、今後さらに多くの研究が進められることは、古地図研究の分野ばかりでなく、美術史研究の分野においてもわが国の初期洋風画の解明に、大きく寄與することと信じます。」

室賀博士は、筆者のような未熟な者にも惜みなく「この貴重な資料」即ち、ヴィーダー博士旧蔵ブラウ図やカエリウス図の写真等を恵与された。心から学問を愛する人のあるべき姿勢であろう。その学恩に応えるどころか「集大成」完成への邪魔だてをしたのではなかったかと恐れるばかりである。

室賀博士と同じく京都山科に住み、博士と親交のあった著名な日本研究者フランツ・ホーレー氏も、所蔵する貴重な資料を独占することなく、専門上の忠言も惜みなく同学の土に与え、「重要なことはその主張がなされたということであって、一体誰がやったのかということは大したことはない」といつていたとのことであるが、室賀博士もこのようなお気持であったのではなかったかと失礼ながら忖度する次第である。

筆者は、かつて室賀博士よりガルのローマ図に関する問い合せを受けたことがあったが、筆者の力不足と怠慢のため、十分お答えをすることができないうちに博士は亡くなられてしまった。室賀・鵜田両氏とも逝かれないまま、残された者の責任の余りの重さに茫然とするのみである。

## 注

- (1) 高橋 正「南蛮都市図屏風からカエリウス世界図へ」 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上』 地人書房 一九八八年。本稿でいう「前稿」は総てこの小論を指すものである。
- (2) 海野一隆「神宮文庫所蔵の南蛮系世界図と南洋カルタ」 有坂隆道編『日本洋学史の研究 X』 創元社 一九八八年。ここで氏は、南蛮系世界図の総合的な系統分類を、主として原図の図法から行ない、宮内庁(御所・香雪美術館(村山氏)・神戸市立博物館(池長氏) 所蔵屏風を合せ「メルカトル図法系」と称している。
- (3) 北村芳郎「南蛮美術(三) 地図」『なにわ』 浪速社 二一五 一九六七年。
- (4) 高橋 正「本邦に伝来せるヨーロッパ古版都市図について」『龍谷史壇』 六三 一九七〇年。
- (5) 中村 拓「南蛮屏風世界図の研究」『キリシタン研究』 九 一九六四年、二二五頁。氏の言及している秋岡氏の論文は次の二篇である。
- 秋岡武次郎「桃山時代の四世界図屏風について」『人文地理』 七巻六号 一九五六年。同氏「桃山時代、江戸時代初期の世界図屏風等の概報」『法政大学文学部紀要』 四 地理学(1) 一九五八年。
- (6) 坂本 満『初期洋風画』(日本の美術八〇) 至文堂 一九七三年 第五図解説。
- (7) 坂本 満「南蛮美術」『南蛮美術と洋風画』(原色日本の美術 二五) 小学館 一九七〇年一八八頁。
- (8) Frutaz, Amato Pietro: *Le piante di Roma, I-III*, Roma, 1962.
- (9) Vita / beati Patris / Ignatii Loyola / religionis / Societatis Iesu / fundatrix / ad vivam express / ex ea quam / P. Petrus Ribadeneyra / eiusdem societatis theologus / ad Dei gloriam / ac / utilitatem / olim scripsit; / deinde Madriti, postea in aesi incidi / et nunc / typis excudi curavit. / Antverpiae / Anno salutis / M. DC. X.
- (10) *Enciclopedia italiana di scienze, lettere ed arti* 〇 Ribadeneyra 〇項。
- (11) 前掲注(6) 〇 I. p. 199.
- (12) 坂本 満『南蛮美術』(ブック・オブ・ブックス 日本の美術 三四) 小学館 一九七四 一八八頁。
- (13) 錦田忠正「南蛮世界図屏風原図考(その一)」『長崎談叢』 五六 一九七四年。
- (14) Keuning, J.: *Willem Jansz. Blaeu; A Bibliography and History of his Works as a Cartographer and Pub-*

lisher, Amsterdam, 1973.

- (15) 嶋田忠正「泰西王侯騎馬画像原図考」『西日本文化』 一二六 一九七六年。
- (16) 高橋 正「南蛮屏風に描かれた都市図の源流について」『古地図研究』 国際地学協会 一九七八年。
- (17) 海野一隆・織田武雄・室賀信夫『日本古地図大成 世界図編』 講談社 一九七五年 解説 三二―三三四頁。
- (18) 室賀信夫「新しい世界の認識―南蛮世界図屏風」『探訪大航海時代の日本』 五 小学館 一九七八年。
- (19) 宮内庁侍從職編『御物聚成 絵画Ⅰ』 朝日新聞社 一九七八年 五頁。
- (20) Schilder, G.: Willem Jansz. Blaeu's Wall Map of the World, on Mercator's Projection, 1606-07 and Its Influence, *Imago Mundi*, 31, 1979.
- (21) Schilder, G.: Three World Maps by Francois van den Hoeye of 1661, Willem Janszoon (Blaeu) of 1607, Claes Janszoon Visscher of 1650, Amsterdam, 1981. この文献は、海野一隆教授の御好意により見るにふさわしい。
- (22) Penrose, B.: Travel and Discovery in the Renaissance 1420-1620, Cambridge (U.S.A.), 1955, p. 162.
- (23) Baker, J.N.L.: A History of Geographical Discovery and Exploration, New Edition Revised, New York, 1967, p. 110.
- (24) Schilder, G.: Australia Unveiled; the Share of the Dutch Navigators in the Discovery of Australia, Amsterdam, 1976, pp. 312-313.
- (25) Ibid., pp. 288-289.
- (26) 岡本良知『十六世紀における日本地図の発達』 八木書店 一九七三年 二四六頁 第三三図。
- (27) 前掲註(26) 二五一頁 第三六図。
- (28) Du Jourdan, M. et M. de La Loncière: Les portulans; cartes marines du XIII<sup>e</sup> au XVII<sup>e</sup> siècle, Fribourg (Suisse), 1984, Pl. 81 et commentaires pp. 256-257. cf. Cortesão, A.: Portugaliae Monumenta Cartographica, Vol. IV pl. 459.
- (29) 例として、Berry, T. M.: The Discovery of Australia; The Charts and Maps of the Navigators and Explorers, London, 1982, pls. 14~19, 21~23 等。いずれも一七世紀にかかわる図である。

(30) 前掲注(21) p. 44.

(31) テイシェイラ型とモレイラ型については、高橋 正「西漸せる初期日本地図について」I. Moreira 系地図を中心として『日本学報』四 一九八五年。同「十六世紀日欧地図交流史に関する二・三の考察」『待兼山論叢 日本学

篇』一九 一九八五年。同「十七世紀日本地図におけるテイシェイラ型とモレイラ型—N・サンソンとR・ダッドレ

ーの場合—」『日本学報』六 一九八七年。(サンソン、ダッドレーの他に、ブラウにおいてもこの二型が見られることは東京国立博物館の二図参照、フィッセル改訂図がモレイラ型を採る)

(32) 『室賀信夫先生追悼文集』日本地図資料協会 一九八八年。

(33) ファン・グーリック「隠れた日本研究家フランク・ホーレー」T・ベイティ他(別宮貞徳訳編)『日本を知る 外人の見た四百年』南窓社 一九七二年 一九七頁。

(補注1) その時期と経緯について、海野一隆教授より次のような教示を受けた。一九七七年四月室賀博士より不鮮明な写真を送られ、同五月に改めてネガの送付があり、そのポジ一枚を筆者が入手した。

(補注2) 御所屏風の典拠がカエリウスだけではないことは、すでに都市図においてもローマ図の存在から明らかであるが、民族図に関しても同様であるとの教示を海野一隆教授より得ている。後考を待つ。

(文学部教授)